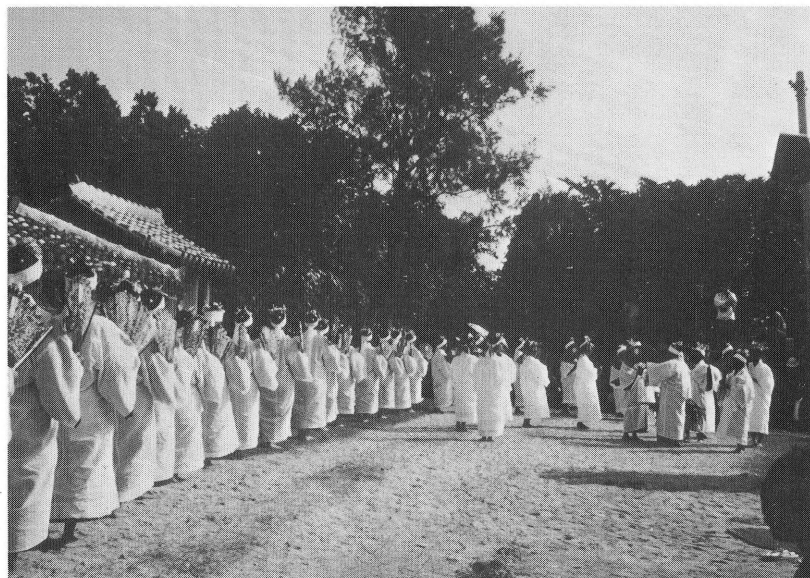




1. クバ（蒲葵）でおおわれた神屋（沖縄県久高島：1978年 植松明石撮影）



2. 神女たちの神遊び（沖縄県久高島：1978年 植松明石撮影）

沖縄久高島のイザイホー

植松 明石

沖縄の創世神話に登場する久高島は、古くは代々の王が重要な祭儀をいとなみ、沖縄古代歌謡といわれる『おもろさうし』の中で、しばしば神の国、靈高き島と讃美、畏敬されうたわれた島だ。イザイホーは、この島で一二年毎の午年、旧暦一月一日から四日間にあつておこなわれる秘儀である。この時、三〇歳以上四一歳までの島うまれの女性たちが神名をいたゞき、ナンチュとよばれる神女になる。一九七八年のイザイホーでナンチュになった女性は八名であつた(前回は二五名)。

第一日のタマガエーの儀は、日が沈んだ夕闇の中を、神聖なクバ(蒲葦)の葉におおわれた神屋(神アシヤギ 写真1)の前でおこなわれた。長い精進潔斎をくりかえしてきた女性たちは白い神衣に身をつつみ、髪を長く背に垂らし、はだしでエーファイと叫びながら、神屋の入口にもうけられたナナツ橋をはげしく行きつ戻りつしつゝ渡り、神屋の中に吸いこまれて行く。不貞の女性はナナツ橋を落ちるとされているのである。やがて神屋にこもつた神女たちの静かなオモロがもれひびいてくる。神屋の後方には男子禁制の聖なるイザイ山があり、そこにクバと茅で葺かれた籠り屋(イザイヤ)がある。ナナツ橋を渡り終えた女性たちは、さらに裸と神遊び(写真2)をくり返しつゝここに籠り、神女として完成する。三日目になるとようやく髪を結び、白はちまきをし、美しいイザイ花(紅、白、黄の紙で作つた花)を髪にさして一人前の神女の姿を島人の前にあらわす。

イザイホーは女性のための秘儀であるが、男性を含めた久高全島民によっておこなわれる。そして島の各所に記憶されている神々の由緒は、この時すべて現実の役目を担う場として秘儀の中でよみがえる。こうして誕生した神女たちの霊的守護の力は、島人にとってまさしく真実のものとして確信されるのだ。イザイホーは多くの沖縄の祭儀らしい祭儀の中でとりわけ敬虔、厳粛、神秘、そして王朝文化とつながる華麗さをもって私たちを戦慄させてやまないものである。